

---

# コールドケース

一真央

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コールドケース

### 【NZコード】

N5110C

### 【作者名】

一真央

### 【あらすじ】

199X年、NY…。物語は、黒の組織による1人の東洋人男性の射殺事件から始まった。その遺体の側に、12歳の少女が震えながら座っていた。そして時は流れ、少女は17歳の高校生として、LAに住んでいた。彼女の名前は「工藤亜希葉」。日本で有名な高校生探偵、工藤新一の実の双子の姉である彼女は、LAでは少し名の知れた、「コールドケース即ち未解決事件だけを解決する探偵に成長していた」。そして黒の組織に接触する際、NYで“赤井秀一”と名乗るFBIの男と出逢い、共に組織を追いつめることを提案し

た  
。  
。

## FILEO・序章（前書き）

この小説は、「名探偵コナン」に登場するFBI捜査官“赤井秀一”と、作者（一真央）のオリジナルキャラクター“工藤亜希葉<sup>アキハ</sup>”（工藤新一の双子の姉）を中心として繰り広げられる小説です。

オリジナル要素が強めなので、苦手な方はご遠慮ください。

## FILEO・序章

199X年、NY……

「いやあああああーーー！先生ーーー！」

一人の少女の叫び声が、夜のセントラルパークに響いた。

「アニキ、コイツも殺しておきましょーか」

黒のマートを身にまとったサングラスの男が、自分の後ろで不敵な笑みを浮かべる金髪の男に問いかける。

その時だった。

遠くの方から、パトカーのサイレン音が近づいてきた。

「チツ……サツか……行くぞ」

「え、あ、はい…」

二人は側に止めていたポルシェに乗り込んだ。

少女と、たつた今殺した男性を残して…

『巡回中に銃声が聞こえましたが大丈夫ですか！？』

勢いよくパトカーから飛び出してきた警官は、血相変えて少女に駆け寄った。

「あ…っ…」

うまく声にならない声で、少女は泣き震えながら、自分の隣に倒れている男性を指さした。

『うわ……』

警官は、あまりにも無惨なその光景に驚き、小さな悲鳴を上げた。しかし冷や汗をかきながらも、なんとかパトカーに戻り、

『……ひがひ、セントラルパーク付近を巡回中の、コアン・スミスです……』

セントラルパークにて、男性が1名、銃弾により死亡しているのが確認されました！

至急、応援よろしくお願ひします!』

コアンといつその警官は、パトカーのヘッドライトを少女と死体に向けた。

『うひ……』

そこには先程は暗くてわからなかつたが、血の海の中で震えている少女。しかしその瞳には、もう涙は見えなかつた。

「先生……」

日本語でそう呟いたのを最後に、少女は記憶を手放して、血の海の中に倒れた。

## FILE 1・最後の決意

『では、君の名前を確認するよ。』

NY市警のとある一室で、ベテラン刑事のジャックが、まるで自分の孫を見つめるように、優しく少女を見つめた。

調書を取るのは、あの夜少女を発見した警官のコアンだつた。

普通なら市警の刑事が担当するのだが、少女は日本語が話せるコアンにしか慣れていなかつたのだ。

『アキハ  
亞希葉…工藤…』

消え入るような声の少女を、NYへ駆けつけた彼女の両親は、マジックミラー越しに見つめていた。

本当なら、出来ることなら、今すぐにでも娘を抱きしめてやりたい。彼女を見つめるのは、工藤優作・有希子だつた。

あれからすでに1週間が経つていた。  
事件は国内外、世界中で話題になつた。

“若き天才作曲家、射殺される”

どの新聞の一面も、この事件を扱っている。

殺害されたのは、東洋人男性、工藤和哉。

彼は世界的に有名なクラシック界の若きホープ、と賞されていた。  
有名な推理小説家である工藤優作の年の離れた実の弟であり、<sup>アキ</sup>亜希葉の叔父である。

10代で海外のピアノコンクールの賞を総なめにし、20歳を過ぎてからは、オーケストラのための交響曲やオペラなど、クラシック音楽を中心とした作曲活動を展開し、一部では“現代のベートーベン”とも呼ばれている。

そんな彼の唯一の弟子が、姪に当たる亜希葉だった。

和哉の方針でコンクールや演奏会に出たことはなかったものの、幼い頃から才能を開花させていた亜希葉は、10歳の時に和哉に付いてNYへ渡った。

いつも一緒にいた、どんなときも一緒にいた、師匠の死。

彼の死の唯一の手がかりは、今、自分の目の前に座っている、この少女だけ。

ジャックは調査書を読みながら、もう一度亜希葉を見つめた。

世間やマスコミには、この少女の存在は伏せてある。この少女が危険にさらされることを恐れて、だ。

工藤和哉は、プロの殺し屋に殺害された。

それが捜査本部の全員一致の見解だった。

一発の弾丸で、心臓の真ん中を打ち抜かれていた。

即死だ。

ユアンが駆けつけていなかつたら、この少女もどうなつていたかわからぬ……

そう思ふと、背筋が凍る。

しかし世間では、あの有名なミコージシャン、ジョン・レノンのように、熱狂的なファンに殺されたのではないか、と噂が流れていた。

『私……の人たちのこと……全然知らない……』

『の人たち……ということは、犯人は複数いたのかな?』

『真っ黒な「一トの男が、2人……』

『そうか……他には何か覚えているかい?』

『いいえ……』

口をつぐんだ亜希葉<sup>アキハ</sup>に、『これ以上お話を聞くのは酷だと思つたジャックは、コアンに田配せして、

『あつがと。じゃあ今口は終わつたよ』

と亜希葉に告げるとい、『いっただよ』と日本語で優しく言ったコアンに、部屋をあとにした。

「よくがんばったね。あれで、君のお父さんとお母さんがこられるよ」

コアンはこり微笑んで、優作たちに視線を送る。

「ねど、う、れん…、おぬれん…、…っ…」

「亜希葉…――」

亜希葉は力なく、足を両親の方へ向けた。

すると優作たちの方が駆け出して、亜希葉をしつかりと抱きしめた。

その様子を、離れて見守るコアン。

虚うな田の少女、亜希葉。

その瞳は、焦点があつておらず、果たして何を見つめていたのか。

ジャックはため息をつきながら、あまり書かれることのなかつた調書を閉じた。

『黒いコード、か。この事件は、内密にFBIに委託するべきだな…』

和哉の遺体は、N.Y市内の墓地に埋葬された。

「亜希葉…、和哉さんに挨拶、しなくていいのかよ…」

亜希葉の双子の弟、新一は、何も言わない亜希葉に眩べりついで叫んだ。

そっと棺に近づいた亜希葉は、眠るように綺麗な和哉の、頬をそつと撫でた。

…………また、亜希葉って呼んでよ…………

唇をキュッと噛みしめて、泣くのを我慢する。  
しかしそれでも、瞳は見る見る涙で濡れてしまつて。

あの、最期の日を想い出す。

和哉が最期に、亞希葉に告げた、たった一つの言葉。

…………愛してゐる…………

もう、後ろは見れない。

亞希葉は誓つた。

もう一度と、泣かなことさ。

「え、父さんと母さん、ロスに来るの?...」

「ここはカリフォルニア州ロサンゼルス、通称LA。

16歳となりジュニアハイスクール（中学）を卒業したばかりの畠希葉は、久しぶりにかかつてきた新一からの電話の内容に驚いていた。

「ああ、もう荷造り終わらせて、今日の毎間に宅配業者が持つてたみてーだぞ」

ため息混じりの新一に、畠希葉も同じようにため息を交えて問いかける。

「でもなんで、新一が電話するの？ 父さんたち、自分で電話してこればいいじゃない」

「二人とも、電話する気なんてはなつからねえんだよ。『畠希ちゃん、驚かせたーい！』なんて言つてたぞ」

「...全くあの人たちは...。一体何考えてるんだ?...」

その時、窓の外から車のクラクションが聞こえてきた。

「あつ、ゴメン新一！ 私もつ行かないと!...」

「あなたも早く寝なさいよー！ そっちもつ夜中でしょ?」

「ああ、じゃあまたな」

「あつがとー ゴード ニューポート新ー！」

畠希葉はふっと血煙の時計を見た。

「うつ… わうこんな時間…！ ジョシコが怒るのも無理ないな…」

勢こよくベッドの上のバッグをつかみ、ドアを開けると、畠希葉は走ってコンビングに向かった。

『ジャックさん、ハンナさん、おはようござまやー。』  
『おはよう畠希葉、よく起れたっ。』  
『はー、もうばっちりー。』

よかつたわね、とにかく朝のせ、ジャックの妻であるハンナだ。

ジャックもハンナも、キッチンで朝食を取っている真っ最中だった。

『畠希葉、ジョシコが外で待ってるよ。ほら、朝食のサンドウイッチだ』

ジャックは茶色の紙袋を畠希葉に渡した。

『うわあ、ありがとー。じゃあ行っちゃいますー。』

『気をつけてー。』

『はーいー。』

亜希葉は再び全速力で、広い芝生の庭やプールを横切り、車庫へ向かつた。

『ふう……』

慌ただしく亜希葉が去つていった後、ジャックはコーヒーをすすりながら新聞を読み始めた。

ジャックは、4年前NY市警に勤務していた、あの事件の担当刑事だ。

事件後、亜希葉は家族と共に日本へ帰るはずだったのだが、それにFBIがストップをかけたのだ。

亜希葉の身の安全を考えて、亜希葉は常に警察やFBIの手の届くところへ過ごすことになった。

それで、ジャックが亜希葉を引き受けることになり、極一部を除いて周りには“ホームステイ”と告げている。

また、この夏に移動となつたため、ジャックは家族でLAに引っ越してきたのだ。

『あなた……、亜希葉は大丈夫でしょうか……？』

心配そうに言うハンナに、ジャックは小さく笑いながら、

『大丈夫さ、ジョシュもいることだし。

それにあの子は賢い子だから、ある程度は自分の身を守ることができるし、バカな真似はしないだろう…』

『そりだといいんですが…ねえ？

最近ジョシュと二人で、何かこそぞしてみたのですよ』

ジャックは笑いながらそう言ったが、ハンナの顔から不安の色は消えない。

『大丈夫さ。別に一人が付き合つてる…なんてことはまず、ありえないしな…』

『そうですよ、ねえ…？』

『亜希葉遅い！ お前が行くつて言つたんだろ！』

『「じめんねホント…！」日本の弟から電話かかってきた』

ジョシュはすでにサングラスをかけて待つていて、怒りながらも助手席のドアを空け亜希葉に早く乗るように急かした。

『で、まあどこに行くんだよ?』

『えっと…じゃあやつぱり、FBIのロス支部に! … つづわあ  
!…』

亜希葉が言い終わるか終わらないかのつけ、ジョシュはいきなり  
アクセルを踏んだ。

ジョシュ・スタンスはジャックたちの孫で、亜希葉と同じ年の16  
歳（ちなみにアメリカでは16歳から免許が取れる）。

この愛車のパジェロは彼と離れて暮らす両親からの、たわやかなプ  
レゼントだ。

ジョシュの父親は、アメリカ合衆国大統領のシークレットサービス  
として働いている。

シークレットサービスとは、首相や皇族、王族などの重要人物を、  
命をかけて守る部署である。

そんなたくましい父親の背中を見てきたジョシュは、（見た目とは  
裏腹に）自身も様々な武術を身につけたり、周りの何倍も勉強に励  
んだりしている。

見た目がとてもワイルドで、地毛のブロンドにオーシャンブルーの  
その瞳は、カリフォルニアの大地によくなじんでいる。

だから周りの女子たちには、決して放つておかれることのない存在  
で、人気もあるのだが…。

『もう! もつと安全運転心がけてよね! 免許取つたばっかりな  
んだから』

隣で怒る亜希葉に、『はいはい』といつ返事で欠伸をしながら返す

ジョシコ。

ジョシコは必要なときに適当に女の子と遊べばいい、と思つていて、あまり恋愛などに興味がない。

だからあまり、女性に対して優しくないのだ（しかしお泣かせるようなことをしない）ところが、無愛想でもモテる理由になつている。

『で、FBIに何しに行くんだよ』

『決まってるでしょ！ まずは先口お会いした、ジョディさんとのじろを尋ねて……』

『“コールドケース（未解決事件）の資料を見に行く”だろ？』

『わかつてゐなら聞かないでよ……』

ため息をつきながらハイウェイ（高速道路）の様子を窓からのぞく畠希葉を、ジョシコは横目で見つめた。

『……黙つていれば美人なのに……』

そうほそつと独り言を言ったジョシコに、『なんか言つた？』といちらを向く畠希葉。

『なんでもない』

と返事して、ジョシコはさらに車を飛ばした。

## FILE2・4年後、LA（後書き）

スミマセン…！オリキャラ多すぎですね；  
しかもまだ、主人公の容姿など、全然書いてないです…！  
今のところ、オリキャラは

工藤亜希葉（主人公・16歳）  
工藤和哉（享年25歳）  
ジャック・スタンス（56歳）  
ハンナ・スタンス（54歳）  
ジョシュ・スタンス（16歳）

…となつております。増えます…！多分…！

ちなみに（）の年齢は、LAに越してからのものです。

## FILE 3：最初の事件（事件編）

『ハワイ亞希葉！ ジョシュもー よく来たわね！』

出迎えてくれたのはやはりジョディだった。

『ジョディ、久しぶり！』

ビルの前で待ち合わせしていた亞希葉とジョディは軽くハグすると、早速中へ入つていった。

『まだこっちに来て日は浅いでしょ？ でもその様子だと、カリフオルニアの気候があなた達によく合つてるみたいね』

『そうなの。NYよりも過ごしやすいかも…』

『それはよかつたわ。で、小さな探偵さんたち、今日は何が知りたいのかしら？』

ジョディは笑いながらカフュに一人を通して、テーブルに着かせながらそう尋ねた。

『小さな、は余計だ』

『あら、ごめんさい。一人が可愛いものだから』

フフッと笑うジョディに、ジョシュはしかめ面をした。

『ジョディ、私たち、コールドケースの資料が見たいの』

『……やつぱり……』

ジョディは軽いため息をつきながら、話を続ける。

『あなた達の活躍は、NYの友人から聞いているわ。  
だけどね、まず亜希葉、あなたはFBIの監視下で、身を守られ  
ていることを忘れてはいられないはずよね。

ジョシュも、もしあなたに何かあつたら、あなたのお父様が困ら  
れるの。

私たちはあなた達に、危険なことをさせるわけにはいかないわ』

しゅんとする亜希葉と、平然と黙つたままいるジョシュ。  
二人の様子を見て、ジョディは再び口を開く。

『でもまあ…あなた達にストップをかけたところで、それに従うよ  
うな聞き分けのいい子じやないことも知つていてるわ。

聞かせてくれない？

何故亜希葉、あなたがコールドケースにこだわるのか…』

亜希葉とジョシュは顔を見合せた。

ジョシュはまつすぐ亜希葉の瞳を見据え、深くうなずいた。  
そして亜希葉はジョディに向き直り、おもむろに口を開いた。

『最初にコールドケースに手を出したのは、1年前…。ホントに最  
初は、偶然だつたんです』

1年前、NY……

亜希葉とジョシュはまだジュニアハイの生徒で、周りより勉強やスポーツが優れていてルックスもよく、いつも一人で行動していたこともあり、学内では多少名の知れた存在だった。

亜希葉は東洋人にもかかわらず、母譲りのルックスが周囲の人を引きつけた。

肩より少し下のセミロングで、真っ黒なストレートのよく風になびく髪、東洋人にしては高い鼻、二重の大きな目。

異国情緒ただようその容姿は、男女問わず誰でも魅了する。

他人に親切で弱いものいじめを許さない亜希葉は、幼い頃日本で和哉に言われて習っていた剣道や空手の技術を駆使して、いつも学内でのトラブルをジョシュと共に解決していた。

そんな彼らは夏休みに入ったばかりの7月の夕暮れ、学校の図書館である1人の少年を見かけた。

その少年は図書館の隅のテーブルに、何かを見つめながら独りぼっちで座っていた。

あまり氣にもとめなかつた亜希葉だが、ジョシュの呟いた『アイツ、泣いてるな』の一言で、少年に駆け寄つた。

『H・Y！　どうしたの？　大丈夫？』

急に声をかけられ、しかもかけてきたのが亜希葉とジョシュだったこともあり、その少年はひどく驚いた顔をした。

『あ……あの……』

『じゃまあああのその少年に、亜希葉はそつとハンカチを差し出した。

『なんで泣いてるの？ よかつたら教えて？』

にっこり笑う亜希葉と、その後ろで自分を見下ろしてくるジョシュ  
に、少年は口を開いた。

『僕、6年のマイク・タイラーです…。あの…』

『言いくことだつたら言わなくていいぞ。亜希葉、お前ももつ  
と他人の気持ち考える』

『なによ！ この子が泣いてるって最初に言ったのジョシュじゃな  
いー。』

今にも言い争いが始まる、といつ前に、マイクは『あの！ 話…聞  
いてもらえますか…。』と不安げに口を挟んだ。

『もちろんさ』

亜希葉とジョシュはマイクの向かいのいすに腰掛けた。

マイクは手に握っていた一枚の古ぼけた写真を一人の前に差し出  
した。

そこには美しい女性に抱かれた赤ちゃんと、その女性の肩を抱く優  
しそうな男性の3人が写されていた。

『それ… 12年前の僕の家族写真です』

『へえ… 美人な母親だな』

『ジョシュってこいつうプロンド美人が好きなのね…』

亜希葉の頭を軽くたたくと、ジョシュはマイクに話を続けるよつこ  
促した。

『僕の母たと…僕が2歳の時、10年前に、殺されたんです…』  
『えつ…?』

再び涙があふれてきたマイクに、亜希葉は『話…続けて…?』と言つた。

『はい…。今田が母さんの命田なんですけど…』  
『母さんはあの日、日にちが変わった真夜中に、1人で崖沿いの道を車で運転していたらしいんです。』

それで、急カーブにさしかかったとき、暗くてカーブがわからなかつたらしくて…ブレーキを踏まなかつたらしくて…』

『その話だけ聞くと、思いつきり事故じやねえか』

『僕もそう思つてたんですけど…最近になつて、事故の前にブレーキフルード（ブレーーキオイルのこと）が抜かれていたことがわかつたんですね』  
『…!』

声を押し殺して泣くマイク。

ジョシュはマイクを見つめた後、隣に座る亜希葉に手をやつした。すると亜希葉の肩が小刻みに震えていたことに気づいた。

『おー、亜希葉…』

…………泣いているのかよ…………

ジョシュは亜希葉にかける言葉が見つからなかつた。

『……マイク……ビーブリッジで再捜査されたの？』

ジョシュはハツとしても一度亜希葉を見つめた。

ジョシュの考えとは違って、亜希葉は泣いてなんかいなかつた。

ああそりか、やつるのはもしかして、武者震いつてヤツ……？

『僕のおじいさん……母さんのお父さんにあたる人が……どうもおかしいって言つて、弁護士や有力な探偵とか通して、警察に掛け合つたんですね』

『それで……？ 容疑者は？ 事件当時に事情聴取された人は？』

『はい、僕の父さんと、母さんの働いていた会社の友達です……』

『やつ……』

亜希葉は急に立ち上がり鞄から携帯電話を取りだし、図書館の外へ走つた。

『あ、あの……亜希葉さん、ビーブリッジたんじょい……？』

マイクはまたも不安げな声で、平然としているジョシュに尋ねた。

『まあ……大丈夫だろ。ちよっとここで待つてろよ……』

『はい……』

ジョシュはマイクを残して、亜希葉の後を追つた。

『それで、その続きを？　まさか今で終わりなわけないでしきう？』

ジョディは興味津々で身を乗り出して亜希葉に問いつ。

『ジョシュー… 続きはアンタ話してよ』

『何で俺が…』

『いいじゃない、私ばかりだと疲れるもん』

ジョシュは大きくため息をはいた。

俺ってコイツに完全に振り回されてるよな……

## FILE 3：最初の事件（事件編）（後書き）

またもやスマミセン…！

殺人のトリックとか、構想してるものがあまりにも曖昧なので、解  
決編は次にします；

## FILLE 4・最初の事件（捜査編）

『もしもしコアン?』

『亜希葉! 電話なんて久しぶりだなあ!』

亜希葉が電話をかけた相手は、3年前から亜希葉が慕つている警官のコアンだった。

しかし今、彼は昇進してロス市警配属の刑事になっていた。

気さくで常に人に優しい彼のことを、亜希葉は兄のように慕つていた。

『どうしたんだ? 何か聞きたいことでもあるのかなお嬢さん』

『… うな… 実は…』

亜希葉は開きかけた口を閉じた。  
自分は一体、何をしているのだろう。

でも亜希葉の中では、マイクのことを放つておけないとこいつ気持ちが強かつた。

亜希葉は深呼吸をしてから、再び口を開いた。

『コアン… ちよつと教えてほしいことがあるんだけど…』

亜希葉とジョシュ、それにマイクの3人は、今ノイ市警の近くにあるカフェテリアで、ある人が来るのを待っている。

『亜希葉ー』

『コアンー。仕事中にermenね…』

カフェのドアが開いて、駆け込んできたのはコアンだつた。角の方に座っていた亜希葉は手を振ってコアンに席を教える。コアンは息を切らしながら空いてこむマイクの隣に腰を下ろし、マイクとジョシュにも挨拶した。

『いいや、もう終わったところだし。…ところで昔の捜査資料なんて、何に使うんだ?』

『じょっとね』

亜希葉は早速捜査資料を読み始めた…。

『ところで、このナースは…?』

ぶつぶつ呟いてくる亜希葉をよそに、コアンはジョシュに向かって話す。

『マイク・タイラー。その事件の被害者の息子』

『はあー? お前たち、一体何してるんだよ?』

『俺も知らねえよ…。亜希葉に聞いてくれ…』

ジョシュは頬杖をつきながら、嫌に真剣な表情の亜希葉を見つめる。

『… これ何？ “ガソリンスタンドの店員の証言” って』

『何が書いてあるんだよ』

ジョシュは突然ぶつぶつ声が大きくなった亜希葉の読んでいるページをのぞき込んだ。

亜希葉は次のよみに読み上げた……

『午後11時30分に被害者は、帰宅途中にあるセルフのガソリンスタンドへ寄つたことが、持ち物の中にはあつたレシートでわかつた。写真をその夜被害者を手伝つたといつ店員に見せると、確かに被害者だと証言した。

しかしここでガソリンスタンドに寄れたということは、ブレーキフルードはまだ抜かれていなかつたことになる……か……。しかもその後、どこにも寄つていみたい

『でも自殺の可能性はゼロになつたわけだ』

『どうして？』

ゴアンの言葉にマイクが反応した。

『だって、これから自殺する人間が、わざわざ給油なんてしないだろ?』

亜希葉はパラパラとページをめくつた。  
そして再び、あるページで手を止めた。

『この写真…』

『その写真です! 僕のおじいさんが専門家に鑑定してもらつて…』

マイクは身を乗り出して、事故の衝撃で変形してしまつているエンジンなどの写真を指さした。

『まじ、エンジンフルードのところ、大きな穴が空いているんですね…』

『ホントだ…』

ブレーキフルードにスポットを当てたわけではないで見づらい写真なのだが、確かに容器に對して25セント硬貨ぐらいの穴が空いている。

ユアンも興味津々に見ている。

『でもこんなに大きな穴なら、開けてすぐになくなるだろ、オイル…』

ジョシュは頭をかきながらもつともなことを言った。

『スタンドの店員もアヤシイ行動はなし。監視カメラでチェック済

みだつて…ん?

店員の証言に追加があるみたい…。

給油後にたまたまボンネットを見たら、隙間からわずかに白い煙が出ていた…！？

開けて調べますと言つたら、彼女は「さつと暑いからヒートしただけだ」と答えてきたので、それ以上は何も言わなかつた…

亜希葉の読み上げた文章に全員が固まつた。

『どうして警察はこれについて追求しなかつたの…？ 店員も何やつてゐるのよ…』

亜希葉は声を荒げてコアンに詰め寄つた。

『亜希葉…』

ジロシロの一聲でハツと我に返つた亜希葉は、難しい顔をしているコアンに『「めんなさい…』と呟いた。

『亜希葉、落ち着け。それに店員だつてまだ17歳つて書いてあるだね…』

『うん…』

亜希葉は更にページをめくつた。

そしてあるページで手が止まつた。

『…そつか…わかつちやつた…』

『…は？』

亜希葉の小さな声に、3人は驚いた。

『…でも、証拠がないのよ…。ねえ、直接対決して、カマかけてみてもいい？』

## FILE 4・最初の事件（捜査編）（後書き）

私には上手く書けません…！ミステリー…！  
赤井さんはあと2～3話したら登場です：

## FILE5・最初の事件（解決編）

亜希葉とジョシュー、コアンは、マークに案内されて、今日の夜自宅で行われるところの食事会に向かった。

『ねえマイク、お母さんのお部屋つて見せてもいいえるかな？』

『はい…。皿のままにしてあるって、おばあさんが言つてました』

『ちなみにお母さんの好きなものは？』

『お花だつて…おばあさんが言つてしましましたけど…』

『食事会は何時から？』

『8時です』

『ふーん…』

質問攻めにあつたマイクは、わけもわからずにただ答えただけだった。

そしてマイクの皿に着くと、亜希葉は鼻歌を歌いながら玄関へ行った。

不安そうな顔をするマイクの頭をくしゃくしゃにしながら、ジョシューは亜希葉を田を細めて見つめながら言った。

『大丈夫だよ。アイツ、突拍子もないことをするけど、バカじゃない

し考えてないわけでもない。

マイク、お前は取りあえず、俺たちが怪しまれないようにこ笑つて  
「友達だ」つて紹介すればいい

『はい…』

そんな一人の会話を聞いて、コアンは笑いながら後に続くも、やはりどこか不安が残る思いを振り切ろうとしていた。

『犯人は、あなたですね?』

そう言つて亜希葉が指さしたのは、マイクの父親だった。

『な…君は一体何を言つてるんだ!』

亜希葉は至つて冷静に話を続ける。

そして周りのジョシュ、マイク、コアン、被害者の元同僚たちは、息を飲んでその様子を見守った。

『トリックをお話しましようか…。』

事件当日の午後、あなたはいつもより一緒に昼食を取るために、奥様のオフィスへ足を運びました。

…しかしあなたはその前に、スーパーでガムテープと大量のドライアイスを購入してますね…?』

『昔のことだ…。そんな細かい買い物まで覚えていないよ』

肩をすくめる父親に構わず、亜希葉は話し続ける。

『まああなたは、奥様との昼食後、職場の社員専用の地下駐車場行つた。

そこで奥様の車のボンネットを開け、ブレーーキフルードに穴を開けてそこにドライアイスを大量に穴に当てる…。

それをガムテープで固定し、後は放置』

『でもそれって会社の駐車場なんだろう？ 誰かに見つかるかもしれないだろ』

ジョシューの言葉に周りはうなづいた。

『…聞くところによれば、その日のその時間は週一で行われる社員全体の定例会議。

毎日一緒に昼食を取っていたあなたなら、そんなことわかつてますよね。

ドライアイスも、きっと計算していたんでしょ。まああの辺りつて危険な道が多いし、アバウトな計算でOKだし。

どうせボンネットの中にもドライアイス敷き詰めたりしてたんでしょう？ 時間稼ぎにね』

『証拠は…？ 証拠がないと起訴できないだろ？』

『証拠はコ・レ』

亜希葉はその場の全員に見えるように、2枚の写真を見せた。

『 こちちはブレークフルードに付いていたなんか粘りけのありそつ  
な布の写真。』

そしてこちちは、事件当日のあなたが立ち寄ったスーパーの防犯  
カメラの映像の一部。

あなた、開業医（自宅などで病院を開いている医者）でしょ？  
その日あなたは普段通りに仕事をしていたって調書に書かれていたし、しかも店の名前もバッヂリよ』

についつする亜希葉は、

『 あとこれ。奥様の気持ちを考えたらどうよつか迷つたけど… や  
っぱり渡すべきよね』

亜希葉はバッグの中から古ぼけた一冊の本を取り出した。

『 花の図鑑…？あの子は花が好きだったのよ』

マイクの祖母は泣き崩れてしまい、祖父はそんな彼女の肩を優しく抱いた。

『 これ、花の図鑑じゃないんです』

カバーを外すと、それは花の図鑑ではなく、ビロードの表紙の日記  
だつた。

そして表紙を開くと、亜希葉はパラパラとページをめくつて声に出  
して読み始めた。

19XX年、2月…

『事故の1年以上前ね』

今日、私、保険に入ったわ。  
だってこれから彼と二人…じゃなくつて、おなかの中の赤ちゃんとの生活が始まるから。  
何かあつたら困るし、これからは妻として、母親としてもつとつかりするの。

12月…

私たちの赤ちゃんよ！ついに生まれたわ！  
名前は彼のお父様からいただいて、マイク。  
マイク、無事に生まれてきてくれてありがとう。  
私、本当に幸せなの…。

翌年3月…

『事件の年よ…』

彼、大丈夫かしら…。

最近働きづめで、なんだか心配よ。体を壊さないで欲しい。

4月:

銀行から電話があつた。

彼への融資をやめたって。

他にも借金があるみたい。

彼、お金がない人は無料で見てあげているし、でも彼は何も悪くないわ…。

私、妻として何も出来ないのかしら…？

でも今は、マイクには申し訳ないけど働くしかないわね…。

ごめんね、マイク

5月:

彼の部屋を掃除していたら、車の構造図や何か計画図書が出てきた。

これ以上は何も書かないわ。

みんな、ごめんね。

愛している

『これで全部よ』

亜希葉は口記を父親に渡した。

『奥様、知つていらしたんですよ。あなたの計画を。  
知つていただけど、あなたに何も言わなかつたのは…』

父親の流す涙に、周りは何も言えなかつた。

『認めますね…?』

ゴアンの言葉に、彼は深くうなずいた。

『亜希葉、す「」いわー!その男、認めたのね』

『ああ、認めた』

ジョシュはアイスコーヒーを口にしながら首を縦に振った。

『けど、なんで? ハッタリって?』

『2枚の写真、あれってウソなの。』

ネバネバな布なんて見えなかつたし、10年も前の監視カメラの  
映像なんて、すぐに手にはいるわけないもの』

至つて冷静に答える亜希葉。

『日記はどうやって見つけたの？ 家族も知らないよつな…』

『本当に見つかるとは思わなかつたんだけど…私、前にジョシュのママとテレビドラマ見てたときに、主人公が日記を別の本のカバーを掛けて隠していたつていうシーンを思い出したの』

『じゃあ最後に、ビッグヒントリックがわかつたの？』

『…彼のその日の行動で、調書に書かれていなかつた“買ったもの”が気になつて。』

『それだけはジョシュに調べたの。ジョシュの友達の親が、そこのお店長さんです。』

『ドライアイスは事件の数日前に注文されていたらしくて、店側の名簿に彼の名前が残されていたの。』

『ジョシュって案外友達＆人脈多くて大助かり』

また二ヶ『コリする畠希葉、無口なジョシュ。』

そんな二人を交互に何度も見て、ジョディは再びため息をついた。

『アイツの言つていたとおりだわ…。』

『一人は糸筋縄じやいかない』ってね

『『アイツ？』』

『ほら、今話にも出てきたじゃない』

今度はジョディが二ヶ『コリ笑つた。』

『『……ゴアン…！』』

『前に仕事でね。今は飲み仲間よ』

口をあんぐりとむすめ亜希葉に、ジョディは続ける。

『じゃあ…私も一人に少しだけなら協力するわ。  
でも、教えて？何故コールドケースなの？

今起きている事件の方が、調べやすいし犯人が捕まる確率も高い  
じゃない』

『それは…いつか言つわ

『…必ずね』

愛のカタチはいろいろ。

## FILE 5：最初の事件（解決編）（後書き）

書くの遅くなつてスミマセン……！  
なんだかグダグダだし；  
あまりトリックとか深く考えないでくださいね；  
トリックの苦情なども受け付けません……！  
推理モノの小説ではなく、あくまで娯楽モノ（？）にしたいので；  
早く赤井さん出したい！！次回は！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5110c/>

---

コールドケース

2010年10月15日20時07分発行